

平成 25 年度岸本国際交流奨学金による海外活動実施報告書

渡航先および受け入れ機関名

タイ バンコク

マヒドン大学医学部ラーマティボディー病院

(Mahidol University Faculty of Medicine Ramathibodi Hospital)

参加団体 国際医療研究会

医学科 5 年 A.E(Female)

医学科 5 年 T.R(Female)

医学科 5 年 Y.R(Male)

医学科 4 年 Z.S(Male)

海外活動期間 平成 26 年 3 月 15 日～3 月 24 日

■スケジュール

- 3月15日 関西国際空港発、スワンナブーム国際空港着、ウェルカムパーティー
- 3月16日 スワン・パッカード宮殿博物館、アムパワー水上マーケット見学
- 3月17日 ジム・トンプソンハウス見学、Siriraj(シリラート)病院見学
- 3月18日 臨床微生物学講義、バンコク寺院群見学
- 3月19日 医学部長表敬訪問、アユタヤ遺跡群見学
- 3月20日 Ramathibodi(ラーマティボディー)病院小児科見学、Salaya(サラヤ)キャンパス見学
- 3月21日 Prasat Neurological Institute 見学、Ramathibodi 病院放射線科見学、
Dusit(ドゥシット)宮殿、Queen Saovabha Memorial Institute(スネークファーム) 見学
- 3月22日 Pattaya(パタヤ)、Koh Lan(コーラン)散策
- 3月23日 Siam(サイアム)周辺散策、フェアウェルパーティー
- 3月24日 スワンナブーム国際空港発、関西国際空港着

■目的

本活動は、発展著しいタイにおいて、タイ国内随一との呼び声の高い大学の医療施設の見学を通して、タイにおける医療の現状を学ぶとともに、タイの文化に触れることにより、国際感覚を養うことを目的としている。また、一連のプログラムにおけるマヒドン大学医学生徒のコミュニケーションを通じて、大阪大学とマヒドン大学の国際交流と互いへの理解を深めることを目的とする。

■内容

プログラムの概要

このプログラムは大阪大学国際医療研究会がタイマヒドン大学医学部と行っている交換留学プログラムである。今年度で20回目となった。例年2月に2週間程度、来日したマヒドン大学の医学生の大阪大学附属病院における実習や、大阪大学の研究施設見学等を企画し、日本における先端医療や先端研究を学んでもらう機会としている。また、大阪でのホームステイ先の手配や京都・大阪・奈良などの案内も行っており、タイの学生にとっては日本の風土や文化・歴史を感じられるものとなっている。

同様に、例年3月に大阪大学の学生がタイに招かれ、マヒドン大学の医学生に案内してもらいながら、マヒドン大学医学部やバンコク周辺の医療施設見学などを行っている。

タイと日本の学生同士が相互に協力しあって、有意義な交流を行っており、友好的な関係を継続している。

プログラムの詳細

本年度のプログラムの内容は以下のとおりである。大きく4つに分類し、それぞれについて詳細を報告する。

1. Mahidol 大学見学
 - 1) Ramathibodi 病院
 - 臨床微生物学講義
 - 小児科
 - 放射線科
 - 2) Siriraj 病院
 - 法医学博物館
 - 解剖学博物館
 - タイ医学歴史博物館
 - 3) Salaya キャンパス
2. Prasat Neurological Institute 見学
3. Queen Saovabha Memorial Institute(スネークファーム) 見学
4. 社会見学
 - スワン・パッカード宮殿博物館、バンコク寺院群、アユタヤ遺跡群など

1. Mahidol 大学見学

マヒドン大学にはキャンパスが3つ存在し、我々の滞在した寮のある Phayathai Campus 以外にも、バンコク郊外に位置する Salaya Campus を持つ。敷地面積は 210ha で、阪大吹田キャンパス(100ha)の土地面積の約2倍だ。ちなみにバンコク中心部のパヤタイキャンパスは 32ha である。もう一つの学舎は Bangkok Noi Campus で、その中には Siriraj Hospital が建っている。

1) Ramathibodi 病院 (Phayathai Campus)

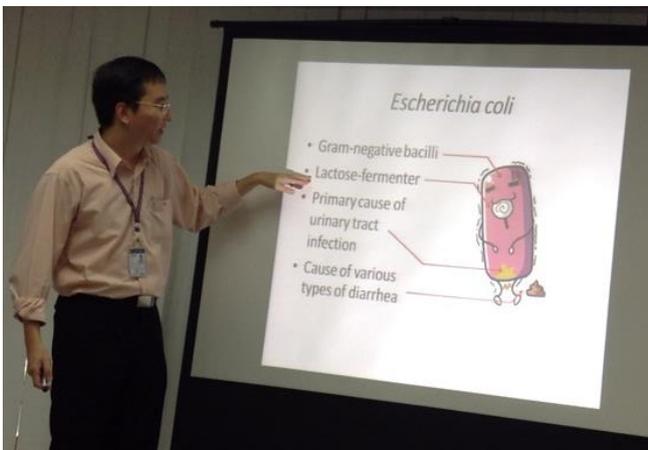
Ramathibodi Hospital が位置する Phayathai キャンパスには、熱帯病患者のための病院、医学・看護学・歯学・薬学・公衆衛生・熱帯医学・理学の各学部がある。もちろん、学生食堂・一般食堂・コンビニなども充実している。現在新しいビルが建設中であり、病棟として利用される予定だという。周辺には国立がん研究所や Prasat Neurological Institute など医学研究所が充実している。バンコク中心部に位置し、非常に利便性が高い。高速道路や線路に挟まれた場所でありながら、静寂性は保たれており、環境は悪くない。

臨床微生物学講義

細菌漫画

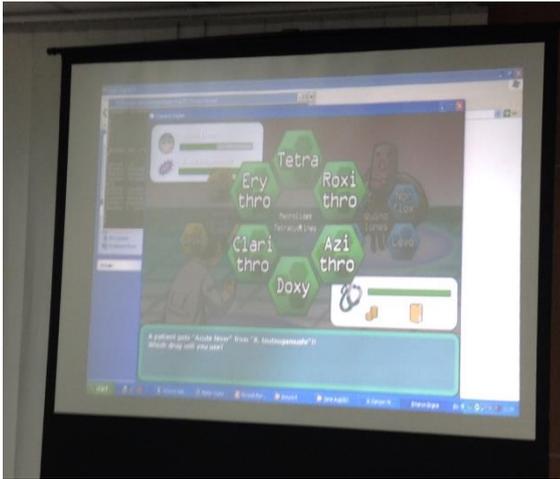
細菌学の講義が暗記事項の多いつまらないものと感じている学生が多いことから、Suthan 先生は漫画を使って、記憶に残りやすい授業を展開している。可愛らしい漫画は先生の友人の漫画家が描いているようだ。

例えば、下の写真中の図は、E.coli の特徴を分かりやすく表している。



免疫漫画

免疫学の講義も漫画を用いて一連の反応を分かりやすくなるように工夫されていた。生体防御を、仮想の国の防衛としてストーリーを設定して、例えば侵入してくる敵を病原体、好中球は兵隊、キラーT細胞は戦士、ヘルパーT細胞は魔法使いの少女としてかわいらしく描かれていた。さらに HIV による免疫不全についてはヘルパーT細胞の魔法使いがおかしくなってしまう話として描かれていた。



細菌 抗菌薬ゲーム

抗菌薬と細菌の関係についても、日本の有名なモンスター対戦ゲームに例えて親しみやすくしていた。肺炎球菌(敵)に対して何を使うかというときに、ペニシリン G を選択すると、効果的にやっつけられるエフェクトが出て、記憶を助けるようにしていた。逆に効かないものを選択してしまうと、敵からダメージを受けてしまい、誤った選択を続けるとゲームオーバーになってしまうというものだった。

小児科

小児科の見学は小児呼吸器科の Aroonwan 先生に案内していただいた。先生は the American College of Chest Physicians の基金である Chest Foundation より、2003 年に Governors Community Service Award として表彰された経歴を持っていらっしゃる、重症呼吸器疾患患者の在宅ケアの向上に努めた方である。

病棟見学

移植患者の小児病棟を見学させていただいた。Ramathibodi 病院では生体肝移植が盛んに行われており、胆道閉鎖症にたいして生体肝移植を行った男の子が元気そうに遊んでいた。また、生体肝移植の手術は日本の医師に指導してもらったとのことであった。また骨髄移植も行われており、サラセミアに対して骨髄移植を行っているとのことだった。

他にも小児入院病棟を案内していただき、蛋白症の入院患者の非侵襲的換気などの様子を見せていただいた。処置室にも入れてくださり、その中で日本製の気管支鏡を使っており、その品質はすばらしいとおっしゃっていただいた。検査部では、院内各部署から検体が輸送ボックスに入れられ、天井を走るレールに沿って運ばれてきていた。

また、ER を見学させていただいた。多くの患者は同じ部屋でベッドに寝ているが、特に緊急を要する患者はとなりの処置室へ移されるとのことであった。

放射線科

放射線科の Advanced Diagnostic Imaging Center を訪れ、3 テスラの MRI を見学した。MRI の原理を全く知らない患者にその安全性あるいはリスクをどのように伝えるのか、というテーマが施設の案内をしてくださった教員から提示され、ディスカッションを行った。先生は普段、「ものを落とした時の音によって、目では見えていなくてもその落差を推定することが可能であるのと同様のことで、MRI では磁場という、(重力のように)普段から私たちに働いている力を利用して、信号を得て体内の様子を知るので、体は傷つくことがないのだ」というように患者に説明しているとのことだった。

研究活動に関しては、脳 MRI データの集積により brain map を作成しており、これと MRI による脳内の鉄の定量などと併せて、神経変性疾患の早期診断に役立つ方針だそう。

また、新型の 320 列マルチスライス CT が導入されており、これを用いて 3D 画像の再構築を行い、術前評価に用

いていた。



2) Siriraj 病院

先にも述べたように、シリラート病院は Bangkok Noi Campus に建つ。こちらは建物がところ狭しと並んでおり、少し窮屈な印象を与える。この病院は Mahidol 大学の起源となる、タイ最古であり 3000 床を有する大病院である。国王も入院されたこともあるという。敷地内に公立と私立の二つの病院を持ち、学生によると私立の部門から運営資金等を調達しているとのことであった。こちらには、Siriraj Hospital の他、医学・看護学・医療技術・理学療法 of 各学部がある。また、このキャンパス内には博物館が存在し、それは Siriraj Bimuksthan Museum と Siriraj Medical Museum の二つに分かれる。

Siriraj Bimuksthan Museum は、もともとタイ南部へと向かう起点となった旧トロンブリ駅のあった場所に建っている。実際出土品や遺構、3D 映像を交え、わかりやすくシリラート病院と併設医学校の設立などについて解説されていた。タイ国王ラーマ5世の御子息にあたるソクラーナカリンは「タイの医療の父」と知られているが、彼の尽力のおかげで、シリラート病院は国内最大となり、さらにはタイの医療の発展へとつながった。彼がハーバード大学留学後に設立した併設の医学校は、後に現在のマヒドン大学となっている。このプログラムを通して、タイ国王と国王陛下がどれだけタイの発展に寄与され、また国民がそれいかに感謝しているのかを痛感する場面が多かった。今回の EP ではこの話抜きでは語れない。



Siriraj Medical Museum は、以下の5つからなる。

Congdon Anatomical Museum

解剖学研究棟にある解剖学の博物館で、学校の資料館のよ



うな雰囲気である。日本では見たことのなかった人体標本が数多く展示してあり、学生一同驚嘆の声をあげた。注目すべきは、全身の神経そして動脈を剖出した標本である。大きさではあるが、人体の神秘をまざまざと見せつけられた。これはいかにして作成したのだろうか。その努力を考えると身震いがする。全身の神経系・血管系を三次元的に理解するには非常に有用だろう。この他人体の輪切り標本や骨標本、水頭症・無頭蓋症の胎児、結合双生児、要人のご遺体も展示されていた。

Songkran Niyomsane Forensic Medicine Museum

この法医学博物館はシーウィー博物館とも呼ばれている。Si-Quey は不老長寿のため人間の心臓や肝臓を食していた凶悪犯罪者であり、裁判所が「死刑後も供養は不要」と判断し、このように展示室でさらされることとなったようだ。このようなミイラその他、鉄道事故にあった被害者や弾丸で打ち抜かれた頭部なども展示され、あまりの悲惨さに息を飲んだ。

それに加え、スマトラ沖地震による津波被害についての展示も見られた。インドネシアの被害については見聞きしていたが、隣国のタイも甚大な被害を受けたことは当然のことながら意識していなかった自分がいた。災害初期の対応がうまくいかず、犠牲者の増加につながったのだそうだ。

Ellis Pathological Museum

病理学博物館では、先に述べたタイ医療の父の説明から始まり、様々なタイプのがんや先天性の奇形の展示が置



かれていた。がんによって侵された腕や心室中隔欠損の心臓を間近で見たのは初めてであったので、すべてがとても新鮮であった。組織を顕微鏡でのぞいたり、模型に触れたり、端末で検索したりでき、展示に工夫が見られるほか、隣の部屋に移る時にくぐるトンネルが血管を模しているなど、ユーモアにあふれる博物館でもあった。教科書だけではイメージしにくい疾患も、ここでは標本と対峙することで理解が促進される。また、医療関係者だけではなく、一般の方にも興味を持ちやすい内容に仕立てられていた。このような取り組みが日本でも広がっていくとよいと感じる。銀杏会館にも、大阪大学医学部の沿革を知ることができる資料館があり、貴重な資料の数々を見学できるが、このように病気や解剖学に触れる施設を一般向けに設置しても面白いかもしれない。

Parasitology Museum

寄生虫博物館では、フィリア症を患った患者の人形や写真の展示、条虫・回虫・外部寄生虫・その他感染症を媒介する生物に関する展示があり、充実したものであった。特に、人体内部から取り出された細長い寄生虫の数々は圧巻であった。

Sood Sangvichien Prehistoric Museum & Laboratory

先史博物館もあるが、残念ながら今回は見学しなかった。考古学的に重要な埋蔵物や骨の破片、石器などが展示されている。

3) Salaya キャンパス

Salaya キャンパス内は水路やたくさんのお木々にあふれ、静寂が保たれた理想的な学習環境が整備されていた。その点では吹田キャンパスと似ているように思える。

特筆すべきは、キャンパス内移動のことである。トラム(電気自動車)が頻繁に運行されており、広大なキャンパス移動も楽に行えるようになっている。実際に乗車したが、窓がないために風が吹き抜けて非常に心地よいものだった。阪大内でも吹田キャンパス内トラムがあれば非常に便利だと思う。当然ながら、自転車の利用も多い。訪問したの

は休暇中であったので比較的少なかったが、通常時は自転車渋滞のようなものが見られるそうだ。

このキャンパスは教養課程で主に利用され、医学部生も含めこちらに何年か通うことになっている。そのこともあり、中央図書館・コンビニ・食堂・学生寮・屋内運動場・音楽ホール・学長室などが存在し、設備がかなり充実していた。

マヒドン大学には理学部や医学部などに加えて芸術学部が存在し、まさに真の総合大学であると言える。敷地内に新築された音楽ホール「プリンス・マヒドン・ホール」は学部直属の楽団の練習場兼演奏会場として利用される。余談ではあるが、東京フィルハーモニー交響楽団による創立 100 周年記念ワールドツアーのバンコク公演がこのホールで行われたという。さらにその公演がこのプログラム中のことで、非常にタイムリーな話題であった。

キャンパス内のある建物内には、大学の沿革をまとめた資料コーナーが存在し、専属のガイドさんの案内のもと見学をすることができた。休日にも関わらず、あたたかいおもてなしを受けえることができ、とても感銘を受けた。ガイドさんによると様々な国からたくさんの方がこうした視察に訪れるそうだ。たくさん動画をういながらの非常に丁寧な解説であり、マヒドン大学はどういう道をたどり、これから何を指そうとしているのかが伝わってくるものであった。この大学の始まりは医学部であるということは、大阪大学が適塾そして大阪医学校の流れを組んでいることを考えると、とても自然に受け止められる。人命を救いたいという設立者の思い、そして社会に貢献できる人材を養成したいという思いに端を発しているとなると、マヒドン大学と大阪大学に親密な関係ができて何ら不思議ではない。現にこのプログラムはもちろんのこと、タイと日本で感染症の研究を共同で行っている。

2. Prasat Neurological Institute



Prof. Ronnachai との記念撮影

大阪大学医学科の学生のご父兄である Prof. Ronnachai のご厚意により、タイにおける神経科領域に関する現状についてお話をお聞きし、Prasat Neurological Institute を見学する機会を持たた。

先生は精神科がご専門で、精神科領域においては不眠症や、うつなどの気分障害などの患者さんが多くいらっしゃるとのことだった。その後先生にご案内いただき、神経科病棟や外来を見学させていただいた。Prasat Neurological Institute は Ramathibodi の敷地内の医療機関であり、先生も Ramathibodi に所属していらっしゃるのだが、機関そのものは省庁の管轄下であり、Ministry of public health の Department of Medical Service に属する。高次医療を提供しているにも関わらず、紹介状などが不要でない上に、予約診療制ではないため多くの患者さんが来られており、午前 9 時前にもかかわらず大変混雑しているようだった。先生の話によると全体で一日当たり 3 千～4 千人の外来患者が来るとのことである。診察室は日本と異なり、患者さんと医師が向かい合って座る形式になっていた。



Prof. Ronnachai の診察室 いつも誰かが朝ごはんを置いてくれているそうだ

3. 国立毒蛇・感染症研究所 (Queen Saovabha Memorial Institute and snake farm)

こちらの施設は、狂犬病に対するワクチン開発を目的としてタイ赤十字社により設立された研究施設であり、現在は人獣共通感染症の診断・研究やワクチン接種、蛇などの動物のもつ毒素に関する研究・医療が行われている。蛇の飼育施設を見学し、毒蛇に関する知識について学んだ。こちらの施設では、毒蛇に関する知識の教育的機関でもあり、私たちが訪問した際にも旅行者だけでなく現地の看護学生も見学に訪れていた。コブラなどが出演するショーを見学させていただいたが、ショーの中ではそれぞれの蛇の生息地や毒による傷害部位、症状などについて説明されていた。その後、ニシキヘビと記念撮影をした。

4. 社会見学

プログラムの期間中、大学内の施設の見学の合間に寺院や王宮、博物館などを訪れる機会があった。また、寺院や王宮、博物館の見学のみならず、バンコクの街並み・人々の暮らしからタイの伝統や文化を感じることができた。

スワン・パッカード宮殿博物館

ラーマ5世王の息子の一人がチェンマイの家屋を移築、住居としていたものを更にその息子夫婦がタイの古美術を集めて展示する博物館として公開している、建物自体も200年以上の歴史を持つ博物館である。展示されている古美術品の中にはラーマヤナやバラモン教をモチーフにしたものがあり、東南アジア圏の文化の土台を感じた。

ワットプラケオ(バンコク寺院群のひとつ)

歴代の国王の宮殿や、国王を祭る広大な寺院が存在している。中でもエメラルド仏が設置されている本堂が有名である。寺院の規模の大きさ、装飾の豪華さに驚いた。建築や装飾は、カンボジア、ラオス、中国を始めとした周辺諸国の影響を受けている。中にはイタリアからの石が使われているという部分もあった。タイの国王が様々な国との貿易で富を手にしてきたことが伺えた。

アユタヤ遺跡群

14～18世紀に王都として繁栄したアユタヤの面影を今も残る遺跡や寺院から垣間見ることができた。なかでもビルマ軍の侵略や、美術品として仏像の転売を目論んだ闇売人によって破壊された仏像や壁が印象的であった。近隣にある、象の背中に乗ることのできる観光施設に、日本の皇族が訪問した時の写真が飾られており、日本とタイのつながりを感じた。

反政府デモの報道の記憶も新しいバンコクであったが、私たちの滞在期間中は、タイの学生が気を付けていた部分もあったのかもしれないが、一度もデモに遭遇しなかった。ちょうど期間中に選挙の投票日があったが、小売店でアルコール類の販売ができない旨の掲示がある(タイでは投票日前日の午後6時から当日の終日までアルコール類の販売が禁止されている)ほかには、特に変わった様子はなかった。混乱は収束しつつあるのかもしれないと感じた。

また、滞在していた大学寮には寮内の喫煙は2000バーツ(約6000円)の罰金であるという旨の掲示があり、タイにおいても喫煙者を減らす方向へ保健行政が働いているのだと感じた。

■ 成果

医療機関見学

新興国のイメージの強いタイであるが、今回私たちが見学した医療機関は首都バンコクにおける屈指の医療機関ということもあり、最新の機材が揃えてある印象を受けた。院内の、特に外来は患者で溢れかえっていたが、ピアノの演奏者を呼ぶなど、患者のストレス軽減に取り組む様子が見られた。Ramathibodi 病院では骨髄移植に力を入れているようで、サラセミアに対して骨髄移植を行うなどといった、かなり積極的な治療が行われていた。サラセミアに対して骨髄移植を行うことの妥当性に疑問を感じたり、机の上に置いてある、患者からのものと思われる食事の差し入れを担当医師が当然のように受け取ることに違和感を覚えたりはしたが、反対に、Siriraj 病院のように自ら運営資金を獲得し、患者に還元しようとする姿勢は日本も見習ってよいのではないかと感じることもあった。良くも悪くも日本とタイの違いを知る良い機会となった。また、阪大生の父兄との面会といった個人的なレベルから、技術や医療機器のやり取りといった社会的なレベルまで、様々なところで日本とタイとのつながりを認めることができた。

Mahidol 大学施設見学

Mahidol 大学は Siriraj 病院を起源とする総合大学であり、適塾を起源とする大阪大学と同じく、医学領域を核にして成長してきた大学である。適塾が民間の有志の集まりであったのに対し、Siriraj 病院は王族の貢献によって設立された経緯があり、身分階級の観点から見ると正反対の過程を辿ってきているともいえるが、民衆のために何が使用という志は同じであると感じた。Siriraj や Salaya で見学した博物館などから、Mahidol 大学の理念が非常によく理解できた。法医学や解剖学の博物館は日本ではなかなか見ることのない標本を見ることができ、そうしたものが一般公開されていることに文化の違いを感じはしたが、臨床実習に出る前に自らの解剖学などの知識を確かめる良い機会となった。いずれの施設でも所属の全く異なる職員や学生から親切に対応を受け、現地の学生同士の部局を超えた協力関係を感じた。

社会見学

バンコクの多くの寺院、遺跡、宮殿などの訪問を通じ、タイの文化形成に宗教と王族が深く関与していると感じた。タイの国民のほとんどが仏教、特に上座部仏教を信仰していることは有名であるが、タイにおける仏教は一部にヒンドゥー教を取り込んでおり、人々の文化のレベルで根付いている。タイでは王族は民衆の間で高い支持を得ているが、王族の中にはラーマーヤナに名前の由来を持つ者もあり、宗教的な背景の中で王族が確立された様子がうかがい知れる。Mahidol 大学は名前の由来が王族にあり、Ramathibodi 病院の名前の由来はラーマーヤナから来ているそうだが、仏教への信仰厚いタイにおいて、宗教的な背景を持つ王族が重要な意味を持っている様子を如実に反映していると感じた。どの寺院においても厳しい服装の制約と、タイ国民と外国人観光客の2段階の拝観料の設定があり、タイにおいて寺院は生活に欠かせない施設である一方で、重要な観光資源とみなされているのだと感じた。宗教観の希薄な日本では普段宗教の存在を意識することはあまりないが、世界の多くで、人々の文化や習慣に宗教が深くかかわっているのだという現実を肌で感じた。また、滞在を通して、タイの保健行政の一端を垣間見た。

■ 抱負

今回の交換留学プログラムを通して痛感したことは、マヒドン大学の学生の学問および社会に対する真摯な姿勢である。意見を求められたときに、曖昧に口ごもる私たち日本人学生に対し、彼らは総じてきちんと発言し、知らないことに対しても自らの推論を立ててできる限りこちらの疑問に答えようと努めてくれた。カリキュラム上彼らのほうが私たちより1年臨床実習の開始が早いのだが、こうした姿勢の差は単にそうした部分から生まれるのではなく、おそらく高度な教育を受けていることに対する自負と責任感から来ているのではないかと感じた。また、少なくない学生が、プログラムの運営と実行に関わっている姿に、社会貢献の姿勢の強さを感じた。

私たちは大学生というものを、社会に出る以前の隔離された存在のように感じ、またふるまうが、実際には大学生こそが、積極的に社会に参画することを見据えなくてはならないのだと目の覚める思いである。今後残る大学生活を送るにあたって、謙虚に学び続けることは当然としたうえで、今自分が社会に対して何ができるのかを考え、実行してゆきたいと思う。

国際医療研究会の活動は、そうした観点から見ると、大学という、決して大きくはないが、ある種の社会に貢献するものであると考えている。実際、この短期交換留学プログラムを通じて大阪大学、マヒドン大学の医学生が、互いの大学の特徴や互いの国の医療体制を多少なりとも知ることができたのではないかと思う。こうした学生レベルでの交流が、私たちがタイで垣間見たような、国際間の相互理解と協力の礎となることを祈るばかりである。国際医療研究会では、次年度以降もこの交換留学プログラムによるマヒドン大学との交流を絶やさずに継続し、また、今後プログラムの更なる拡充を図ろうと考えている。こうした小規模な交流の継続が発展し、将来、大阪大学とマヒドン大学の正式協定という形で実を結んだとしたら存外の喜びである。

■ 謝辞

今年のプログラムを開催するにあたって、下記の方々にお世話になった。この場を借りて心からの感謝を伝えたい。

日本側でのプログラムの開催に当たり、

大阪大学医学系研究科公衆衛生学教室 磯博康先生

私たちの顧問であり、日ごろの活動にご理解とご協力をいただいている。本プログラムにおいても留学生へのレクチャーを快く引き受けてくださった。

大阪大学医学部付属病院

救急科 中川先生、室谷先生、 心臓血管外科 平先生、 小児科 酒井先生、 感染制御部 関先生

大阪大学医学系研究科 免疫細胞生物学 石井先生

微生物学研究所 竹内先生

以上の機関、先生方は留学生へのレクチャーを快く引き受けてくださった。

豊中市・吹田市のホストファミリー協会の方々にはタイの留学生の滞在中温かく留学生を受け入れていただいた。

タイでのプログラムにおいては、

Ramathibodi Medical Student Committee of the International Affairs に大変お世話になった。

また、Ramathibodi 病院の医学部長である Prof.Winit Phuapradit をはじめとして、Dr.Suthan、Dr.Witaya、Assoc.Prof.Suvipaporn、Prof.Chaitip、Prof.Aroonwan、Prof.Ronnachai など多くの先生から温かい歓迎を受けた。

最後に、本プログラムによる海外渡航に対して深い理解を示し、本企画を採択してくださった

岸本国際交流奨学基金並びに、この基金に多大なる貢献をなさっていらっしゃる岸本忠三先生に心からの感謝を

申し上げる。ありがとうございました。